



中島正雄の
つれづれ虫
其の一ひきめ



つれづれなるまゝに、
日くらく、
ひて、
よしな
はかと
れば、
ものぐ



ものぐるほしけれ
やくきつ
を、そ
に移りゆ
に、硯にむ
なるまゝ

私 が大きくなったから?

私が動植物に興味を抱いてから何年経つのでしょうか？少年の頃、昆虫を求めて山林を彷徨い、目的の蝶を採集した喜び、淡水魚を飼育しながら種名を覚える喜び・・・、山で道に迷い、日が暮れてから帰宅したこともありました。一喜一憂したあの頃を考えると、精神的には今もあまり変わっていないと感じます。

ところで、最近こんなことがありました。ひょんなことから、社内でプラナリアの大きさについて議論になったのです。「子供の頃3cmぐらいのプラナリアを見たことがある。あれは、間違いなくプラナリアだった！」と数名が主張しました。早速、飲み代の賭けが成立し、週末には約23年前の記憶を辿り、湧水池へ出かけました。おぼろげな記憶を頼りに、ようやくたどり着いた先には湧水を汲み上げるポンプがあるのみで、池の痕跡は跡形もなく消えていました。

子供の頃に秘密にしていた穴場 - 大きなヤゴ、プラナリアやニホンザリガニを採って英雄だった、あの頃の秘密の場所 - は次々と姿を変えています。たかが23年、しかしこのスピードで・・・と考えると、「自分の子供が自然に触れるには、随分と遠出しなければいけないのだろうか」と札幌に住んでいる私でさえも考えさせられてしまいました。

ちなみに賭けの結果は・・・わざわざウトナイ湖まで行き、「キタカズメウズムシ」をゲットしたまでは良かったのですが、1.5cmしかありませんでした。(トホホ・・・)



写真1 キタカズメウズムシ1.3cmの個体。1.5cmの個体は白色個体でピンボケだった。

それでも意外な発見はあるもの

最近、ナキウサギについて、新たな発見がありました。諸事情で詳細データ等を述べることは出来ませんので、概略のみ書かせていただきます。ご了承下さい。

これまで私が経験したナキウサギ調査の対象地域は、文献等の既知点付近であり、規模の比較的大きなガレ場が分布する地域でした。ところが、最近調査を行った地域は「露岩地がいたる所に分布するものの、大きなガレ場からは数キロ離れており、一般に言われている移動距離の範囲内ではない。周辺は数十年前に植林したトドマツ・アカエゾマツ等の人工林が多くを占めている。標高は200~500m程度。」といった環境です。

調査初年度は、典型的な斜め切りの貯食と鳴き声を確認、次年度の5月の調査では、ナキウサギのものと断定できる新しい貯食やその他の痕跡





ナキウサギ（撮影 北海道支社・伊藤美穂子）

等を確認出来ず、6月には標高350m付近に貯食を、450m付近では貯食と糞を確認することが出来ました。

ここで仮説なのですが、「この地域のナキウサギは6月頃から分散し、分布を拡大しようとしているのではないか？現在の生息地は生息基盤としては小さく、既に飽和してしまったのか？あるいは何らかの要因で生息に適さなくなってしまったのではないか？昨年の調査では標高250m程度の林道脇にも貯食が確認されており、谷地形で比較的気温が上昇しない場所では標高が低くても分布するのではないか？」等々があげられます。知識欲を駆り立てるデータが得られました。

その他にも、最近の知見には標高100mや300m程度における生息地の情報があり、これは一般的に知られているナキウサギの生態の例外的な事例にあたります。ムクゲネズミの分布についても、日本では日高・大雪山系、天塩郡天塩町、利尻、礼文、色丹島と考えられていましたが、数年前に黒松内町で確認されたなどの新知見がありました。これは、その他の動植物についても一般常識にとらわれず、慎重を期すべきであるとの教訓です。

好きと苦手も 共生させれば？

バットディテクターを持つと、普段は存在にさえ気が付かなかったコウモリが意外と広く分布していると気づいたこと、図鑑等では標高700m以上の高山に生息すると言われているナキウサギが300m程度の標高にも生息していることなど、私の知らなかった新しい発見には心を躍らせてしまいます。好きな分野で、己の無知を知り、克服する作業の何と楽しいことか（と辛い時は自分を励ましています）。

ここ数年、私たちの業界ではGISの活用、HEP、様々な手法での数量化やSEA等の導入が進み、めまぐるしい早さで業務の流れが変わりつつあります。私も数値化の手法を勉強し、「あんなことやこんなことが出来るかな？」と考えを巡らせながら、知識を取り入れています。非常に楽しく、現状を打開する一手は無いかと思案する今日この頃です。

反面、実際に取り組んでみると、基礎情報の精度や、必要なデータの不足により出来る事が制限されてしまったり、ファイル形式がバラバラであったり、誤った情報の修正など仕様になり作業が必要になったりするなど、現段階の既存情報では、実際の作業は頭で考えているよりも苦難な道のりであるように思います。過年度データのデータベース化など、徐々に基礎データを集約する業務も出始めていますが、ソフトの統一など、課題は山積みのような感じです。国土のランドデザインやSEA、環境の数値化などを考えるに当たり、まず、今は足元を見直す時期

ではないでしょうか？

とは言え、当社の過去の報告書を見ると、多くの種数を得ることを優先し、環境毎に比較しにくい地点を設定していたこともあり、当時から考慮していれば・・・と、顔から火が出る思いです。

実際に業務を立ち上げるために計画書を書く、「その傾向を得るためには仕様の調査面積では難しい」、「データ量を得るために莫大な時間を割かなければならない」など業務の枠組みの中では解析が不可能と思える計画になってしまいがちです。「この道路とその道路とあのダムとそこの河川の調査を共同で行えば、もっと良い解析が出来るのに」といった愚痴がつい口に出てしまうのは私だけなのでしょうか？

そんなことを言いながらも、新アセスメント法対応の方法書、河川水辺総括資料、様々なGIS業務等、比較的目新しい業務の成果を見ると、手前味噌ですが、出来映えに感心してしまいます。やはり、営業を担当していると、かなりひいき目になってしまうのでしょうか？お恥ずかしい限りです。

幼い頃から、私が一喜一憂した自然。これらを保全するために、今何が出来るかを最近よく考えます。何が要因でどのように環境が変わってしまったのか、何を行えば何処まで自然を復元出来るのか。このようなことが高確率で予測、検証出来るような基礎データを後世に残し、将来は充実した基礎データに基づく現実的な提案が当然という状況になるように・・・と今真剣に考えています。

（北海道支社支社長代理・中島正雄）